

スーパー母さん

齢 九十の母が 手押し車を頼りに
ゆつくり ゆつくり帰ってくる
老人会 仲間の後を だれよりも遅く
坂の途中にある 実家の表で
ぼちぼち 帰る頃かな？と待っている
すると 花の つぼみが ぽつと
綻ぶふうに ほほえむ母が見える

いつも来てもろうて ええねチヨさんは
ほうよ 独り暮らしも ええもんよ
あつけらかんと笑う母 夫を戦地に送り
以来、身につけた 母という強さなのか
疎開先では 赤んぼうの私を 背負い
びんご表を織ったそうな
村一番の織り手じやった 仲買さんに
そりやあ もう 喜ばれたもんよと
さても 若かりし頃を自慢する

ふる里は瀬戸内の 坂で名高い町である
毬みたいに降りるけど 上りはきつい
ほんとうは そんな坂を
母さん あなたは いくつ上ったのかしら
女手 ひとつで
(ありがとう ごめんなさいね)

ちつと腰が痛いがのう そう いいつつ
私の好きな 白和えを作ってくれる
電磁調理器だつて 携帯電話だつて
流行りものを使える スーパー母さんだ
日々 確かな生命を感じながら
今日も とつとつ 坂を歩む 母
うちは百歳になつても歩くけえの、と
ええ そうね きつとね

私の笑顔と あふれる陽光を とりこんで
母の一日は 過ぎてゆく
瀬戸内の坂に 生まれたての光が まぶしい